J リーグクラブにおけるユース出身選手に関する調査

スポーツビジネス研究領域
5010A023-2　兼清　文彦　　研究指導教員：　平田　竹男　教授

【序論】

J リーグクラブ（以下, J クラブ）は, アカデミーと呼ばれる組織で選手育成を行っている. アカデミーでは, J リーグプレーヤーの輩出を目的とし, 日本サッカーの強化につながるよう活動を推進している. しかしながら, クラブのユース育成に関する情報は公開されておらず, ユース育成が実際に強化につながっているのかを検証することは難しい. また, ヨーロッパでは, プロサッカークラブのユース育成に関する研究が注目されているのに対し, J クラブのユース育成に関する日本国内の研究はほとんど見られない.

アカデミーにおけるユース育成では, 時間と費用を投じて育成した選手がトップチームの戦力となることが望ましく, プロ選手を輩出することに加え, 輩出した選手がトップチームで活躍することが重要である. そこで, 本研究では, J クラブを分析対象とし, ユース出身選手がトップチームにおいてどれほど活躍しているのかを明らかにすることを目的とした.

【手法】

本研究では, J クラブに所属する選手がどれほど活躍しているのかを明らかにするために, 選手の出場時間に着目し, 出場時間がチーム 11 位以内の選手をレギュラークラス, 同じく 12 位から 18 位以内の選手をサブメンバークラスとして, それぞれのクラスに含まれるユース出身選手の人数を算出した（①, ②）. 出場時間が 18 位の選手までをサブメンバークラスとしたのは, スターティングメンバー（11 人）にベンチ入り可能な人数（7 人）を含めると 18 人となるためである. 本研究では, ベンチ入り可能メンバーを含む 18 人の選手を各クラブにおける戦力要因と見なし, 各クラブがトップチームに輩出したユース出身選手のうち, どれほどの選手が戦力要因に含まれるのかを調査した.

さらに, J クラブにおける①と②の合計値をユース育成指数「YDI(Youth Development Index)」と定義し, 戦力要因となる選手に占めるユース出身選手数を算出したうえで, ユース出身選手がトップチームのレギュラークラスなのか, サブメンバークラスなのかを分析した.

分析対象とする期間は, J リーグのホームページにおいて, 試合記録の情報開示が開始された 2002 年度から 2010 年度までの 9 年間とし, それぞれの年度について分析を行った. 分析対象とする J クラブは, 2002 年度時点で J リーグに加盟していた 27 クラブとした.

【結果】

本研究では, ユース出身選手, YDI, ユース出身選手の内訳の 3 つを調査した.

・ユース出身選手

J リーグ全体では, ユース出身選手数が 2.56（2002 年度）から 6.63（2010 年度）へ約 2.5 倍に増加していることが明らかになった.

最もユース出身選手を多くトップチームに登録させていたクラブを見ると, 2002 年度から 2006 年度まではガンバ大阪と東京ヴェルディ（2002 年度はガンバ大阪, 2003 年度はガンバ大阪と東京ヴェルディ, 2004 年度は東京ヴェルディ, 2005 年度はガンバ大阪, 2006 年度はガンバ大阪）, 2007 年度と 2008 年度は

横浜Fマリノス, 2009年度は柏レイソル, 2010年度はガンバ大阪であることが明らかになった.

また, 東京ヴェルディと横浜 F マリノスのユース出身選手数の平均値（2002 年度から 2010 年度）が 9.67 と最も高く, 次いで, ガンバ大阪が 9.44, サンフレッチェ広島が 9.22 であった. 直近の 2010 年度においては, ガンバ大阪のユース出身選手数が 17 人と最も多く, 次いで, 横浜 F マリノスの 16 人であった.

・YDI

全クラブの平均では, 2002 年度から 2010 年度にかけて, YDI が上昇していることが示された. 2002 年度と 2010 年度を比較すると, J クラブの平均 YDI は, 1.22 から 2.52 へと約 2 倍に増加しており, また, YDI が 0 であるクラブ数は, 2002 年度から 2010 年度にかけて, 14 から 7 へと半減していることが明らかになった.

YDI には, レギュラークラスとサブメンバークラスの選手が含まれているが, 中でもレギュラークラスの割合を見るために, YDI に占めるレギュラークラス率を算出した. レギュラークラス率が高いクラブを見ると, ガンバ大阪が 74%, 次いで, ジェフ千葉が 71%,サンフレッチェ広島が 68%であることが示された. ガンバ大阪の YDI の内訳を見ると, 2002 年度から 2010 年度の YDI にかけて, レギュラークラスの人数がサブメンバークラスの人数を上回っていることが明らかになった（2007 年度は同数）.

・ユース出身選手の内訳

2002 年度から 2010 年度にかけて, レギュラークラスとサブメンバークラスの選手が増加していることが明らかになった. 2002 年度と 2010 年度を比較すると, レギュラークラスは 0.74 から 1.63 へ, サブメンバークラスは 0.48 から 0.89 へと, ともに約 2 倍に増加していることが示された. また, その他の選手数の推移を見てみると, 2002 年度から 2010 年度にかけて, 1.33 から 4.41 へと約 3 倍に増加していることが明らかになった.

【考察】

本研究により, 2002 年度から 2010 年度にかけて, J クラブのユース出身選手数が増加していること, ユース出身選手を輩出していないクラブ数が減少していることが明らかになった. また, 2002 年度と 2010 年度における YDI（レギュラークラスとサブメンバークラスの合計）を比較すると, J クラブ全体で約 2 倍に増加していること, YDI が 0 であるクラブが半減していることが明らかになった. 以上のことから, J クラブ全体として, ユース育成のレベルが向上していると考えられる. これらを J リーグにおけるユース育成の実績として評価することができよう.

ただし, ユース出身選手数の内訳を分析したところ, その他のユース出身選手数が増加傾向にあることが示された. 本研究においては, YDI に含まれるレギュラークラスとサブメンバークラスを戦力要因と見なし, 分析を行った. つまり, その他のユース出身選手数の増加は, 戦力要因として活躍できているとは言えないユース出身選手数の増加を示唆する.

また, 2002 年度と 2010 年度のユース出身選手の内訳を比較すると, YDI（レギュラークラスやサブメンバークラス）が約 2 倍の増加であったのに対し, その他のユース出身選手が約 3 倍に増加していた. このことから, J クラブにおけるユース出身選手数は増加しているものの, 戦力要因としての活躍ができないユース出身選手が相対的に多いことが考えられる. これは, J クラブにおけるユース育成の課題と見なすことができよう.